

回
帰
す
る
月
々
の
記



る
江苏工业学院图书馆

藏書章

の省

記

木 繩 蔵
蔭 文
に 杉
て の

新宿書房

回^{かい}帰^きする月^{つき}々^々の記^き

続・縄文杉の木蔭にて

発行日

一九九〇年七月三〇日

著者

© Sansel Yamao, printed in Japan, 1990

山尾三省

発行者

村山恒夫

発行所

新宿書房

東京都千代田区九段南四十六三二七〇二二〇一
電話〇三三六三二六〇 FAX〇三三六三二七三五

振替東京七二二四九七

編集

室野井洋子

装丁

鈴木一誌＋大竹左紀斗

写真

山下大明

手動写植印字

小野頼二

印刷所

理想社印刷所＋(株)フクイン

製本所

ISBN 4-88008-138-8 C10095

松岳社青木製本所

乱丁・落丁本はお取りかたいたします

回

帰

す

る

月

々

の

記

目

次

第一章

ムカシウサギ

九

晩御飯

一〇

トカキン

一四

ムカシウサギ

一八

正五九しやうごくの祭り

二二

滝の意味

二六

台風とミヨウガ

三〇

十五夜の綱引き

三四

浄土

三八

命を識しる者は全て弱者である

四二

島いごい

四六

第二章

びろう葉帽子の下で

五一

旅人達

五二

海に春がくる日

五六

縄文の火

六〇

第三章

苔いも

六四

びろう葉帽子の下で

六八

タンポポと仔猫

七二

海と火星蝕

七六

縄文杉登山

八〇

夜釣り

八四

津軽へ

八八

離れ猿

九三

方位の真実

九四

一陽来復

九八

いろいろ焚き

一〇二

暖島異変

一〇六

屋久島の文化とアメリカ的文明

一一〇

白い鹿

一一四

高坏たがひの時

一一八

棟上げ作業

一二二

小さな友たち

一二六

第四章

離れ猿

一三〇

妻の死

一三五

うるま祭り

一三六

順子よ

一四一

夫婦墓

一四六

ゴン

一五一

チベットの死者の書

一五六

お茶飲み

一六一

訪問客

一六六

トペラとの出会い

一七〇

花々の慰め

一七四

十便十宜

一七八

色即是空 空即是色

一八二

第五章

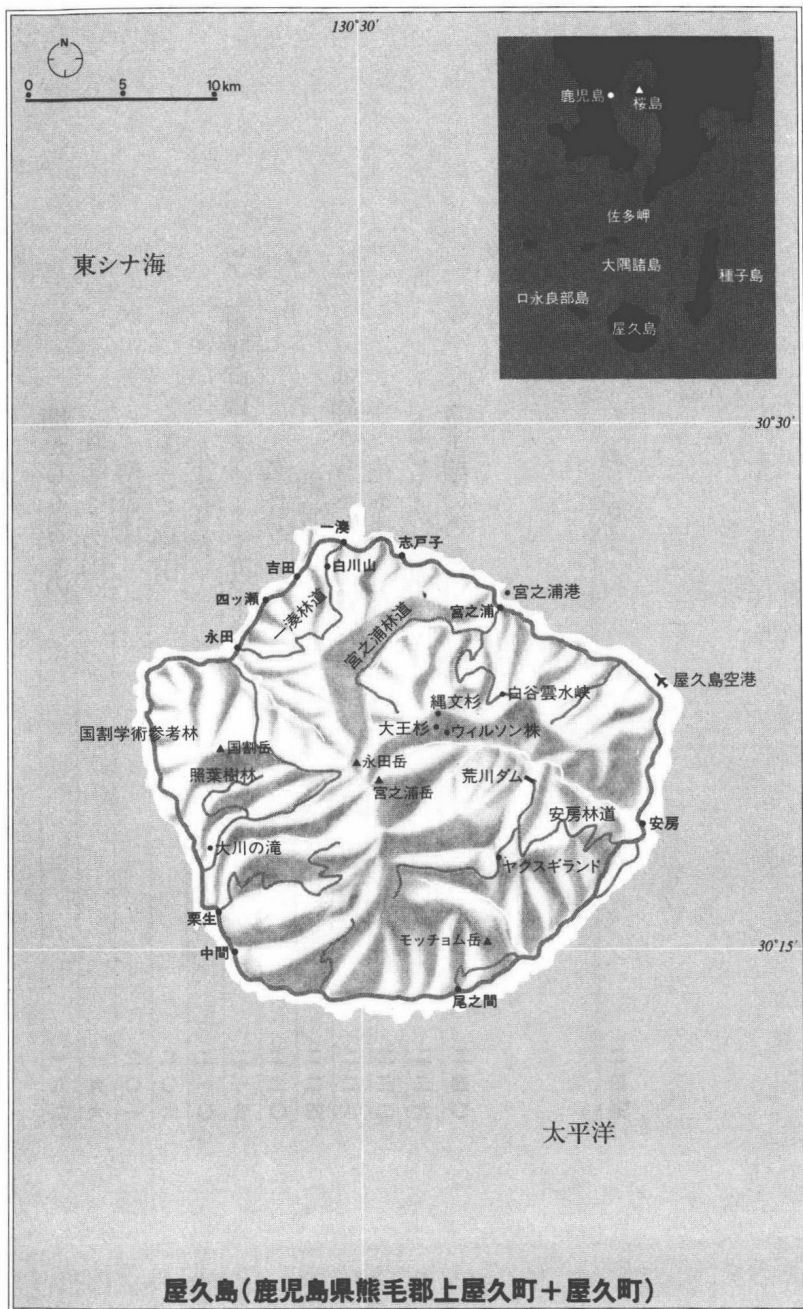
再生

一八七

シヤコ貝の変化

一八八

畑からくるもの	一九二
弥陀 たの の山	一九六
精霊達	二〇一
ふるさと・神田	二〇六
小さな家	二一〇
斎場御嶽 さいふうたき ・こカマドのカミ	二一五
墓作り	二二〇
納骨	二二四
沖縄から来た山羊買い	二二八
花木達	二三二
トッピーの就航	二三六
竜舌蘭のある村	二四〇



回帰する月々の記

続

・

縄文杉の

木陰にて

第
一
章

ム
カ
シ
ウ
サ
ギ

晩御飯

三月二十五日、終業式が終わって、子供達がそれぞれに成績表をもらって帰ってきた。

二年前に島の高校を了え、東京の大学に進んだと思つたら半年も経たぬうちに退学届を出してしまつた長男は別として、家には、高一を頭に中二、中一、小五と四人の学校通いの子供達がいる。四人とも、それぞれ小人数の島の学校ながら、学年で五番以内の成績を持ち帰り、まずまずの出来ではあつた。島でも、最近では英語塾だのピアノ教室だの、学習塾なども始まっているが、わが家ではそうしたところへ通っている子はもちろん一人もない。高一と中一の二人は、ひたすら部活動の野球に精を出し、中二と小五の二人は、どちらかというと読書にふけている。小五は女の子で、読書が大好きだが、スポーツ少年団のバレーボールも熱心にやり、スポーツの楽しさも少しづつ知りはじめているところである。

一学年が無事に了つたわけだから、その日の晩御飯はささやかながらお祝いであつた。妻がスシを握っていた。

春先の今の季節は鯖さばがとれず、従つてスシに使えるような魚はなかなか廻つてこないのだが、その日はたまたま、大敷網おおしきあみに出ている隣人のシチューから、マツオと呼んでいる魚が廻ってきた

のだった。僕はその実物は見なかったが、七人家族がその一匹で、スシを充分食べられるほどのものだったから、かなりの大判だいはん（島では大型の魚をそのように呼ぶ）だったのだろう。その上、妻が言うには、大敷網の魚にしてはめずらしくまだ生きていて、三枚におろしても内臓がびくびく動いていたそうである。隣人に漁師がいるとは有難いことで、そういう魚をさりげなく投げ入れていくてくれるのである。

スシにつきものの吸物のほうは、その二、三日前に別のルートからもらった黒魚クロイサのアラであった。ここらでは黒魚と呼ぶが、関東方面ではメジナと呼んでいる、大変味のよい魚である。マッオのにぎりズシと、黒魚の吸物、それだけの祝いの御馳走であるが、子供も大人も大喜びであった。あまり明るいとはいえない六十ワットの裸電球の下で、お皿の上のスシは見る見るうちになくなっていくた。

次郎（高二）、お前は、国語と英語に力を入れなくてはいけない。英語はむろん大切だが、国語力、特に論文の読解力と、論文を書く力との両方を身につけなくてはいけない、と、食事を終えてから、もらってきた成績表を見ながら僕は言う。

次に踊我ヨガ（中三）、お前は全体的に今学期は油断をしていた。なぜ二番に下がったのか、自分が一番よく分っているはずだ、と僕は言う。

次に良磨ライマ（中二）、お前は数学を投げ出している。中学で3しかもらえないようでは、先が思い

やられる。次に裸我（小五）、お前は三学期とも全科目Aで立派なものだが、このへ字が正しくきれいに書ける」というところに△がついている。字を乱暴に書くのは、心が乱暴なのだよ……。

学期末ごとに、あるいは学年末ごとに繰り返されるありきたりの批評であるが、ひとつの節目でもあるので、世の中に敬意を表してありきたりのままに言うのである。

子供達の教育について、僕に自信を持つて言えることはひとつのことしかない。それは、この島で、小・中・高校を出させるということである。この島で高校までを出し、それから上はないのだから、それ以上に行きたければ島を出るほかはない。島にいる間が僕の領分であり、その領分は、ただ島の小・中・高校に行かせるということで、九九パーセントは達成されるのである。残りの一パーセントが、上に記した晩御飯後のお説教のような形で表われる。むろん怠惰は、学校の勉強にしろ何にしろ、僕としては決して好ましい状態とは思わないが、大切なことは、そういうことも含めて、この島の学校に行き、島の子供達と交わり、島の文化と伝統をしっかりと骨肉に刻むことだと考えている。島の文化と伝統を培ってきたものは、いうまでもなく島の自然である。人間存在の本質である自然というものの、究極の光であるもの、それを一日でも長く学ばせることが、子供達に対する僕の務めである。

マツオのにぎりズシと、黒魚のアラの吸物の祝いの食卓に向かいながら、僕がひそかに思っていたのは、ここに居る子供達の一人でも二人でもいいから、怠惰や敗北感からではなく、積極的

に大学進学などを選ばず、本当の希望において、手職の仕事に就きたいと願う子供が出てこないか、ということであった。僕が自分でそうであると自認している、この詩人という仕事もむろん手職の仕事に属するのだが（体を動かさない机上の詩人とは、詩人の墮落である）、それも含めて手職の仕事に、次代の夢を託したのであった。

たとえばそれは、次郎、お前は、船乗りにならないか。海を見つめ、海と語り、海が神であると深く識る者にならないか。

たとえばそれは、踊我、お前はパン屋にならないか。パンを焼き、パンを売り、人々にパンという幸福を供するものにならないか。なぜなら、お前が一番望んでいるものは、幸福と呼ばれる光、であるように僕には感じられるから。

良磨、お前は焼物師にならないか。沖繩にでも行って、優れた琉球焼の伝統を身につけ、土と火が、慈であり悲でもある真理を、探りつづけてみないか。そしてまた、女の子である裸我、お前は僕のあとをついで、百姓でありながら詩人でもある旅を、女の側から歩いてみる気はないか。生きることは、自然への永劫回帰であると、僕とは別の言葉で語ってはくれまいか。

今年はどうしたことか、もう四月も末になったというのに鯖^{さば}がやってこない。鯖の到来の季節を告げるシャリンバイの白い花が野山を飾り、あちこちの果樹園ではボンカンやタンカンの花が咲きそろっているのに、一湊^{いっそう}の港の鯖船はもやったままで、沖に出ることがない。

島には、漁師の明日は百姓の来年、ということわざがある。漁師は今日不漁でも明日は大漁が期待できるが、百姓は今日の種まきに失敗すれば来年まで待たねばならない、という意味である。つまり、同じ天然自然に恵まれての仕事でありながら、百姓よりは漁師のほうが有利であることを言いあらわしたものである。一湊の漁師達は、今日は来るか、今日は来るかと、鯖の群れが近海に回遊してくるのを待っているが、海からは何の音沙汰もない。鯖が来なければ、鯖漁を主体にして暮らしている一湊の里は、死んだも同然である。普段でさえ人影が多いとはいえない里の商店街は、ひっそりと静まりかえって、やたらに好天気ばかりが続いている。天然自然が相手の仕事だから、どこへ愚痴を持っていくこともできず、ただじっと鯖が来るのを待つほかはない。

僕は、自分が漁に出ないので、漁の世界の具体的なことは少しも分らないのだが、この十年来初めてと思われるほどに鯖が遅れているにもかかわらず、そして一湊の里はひっそりと死んだよ